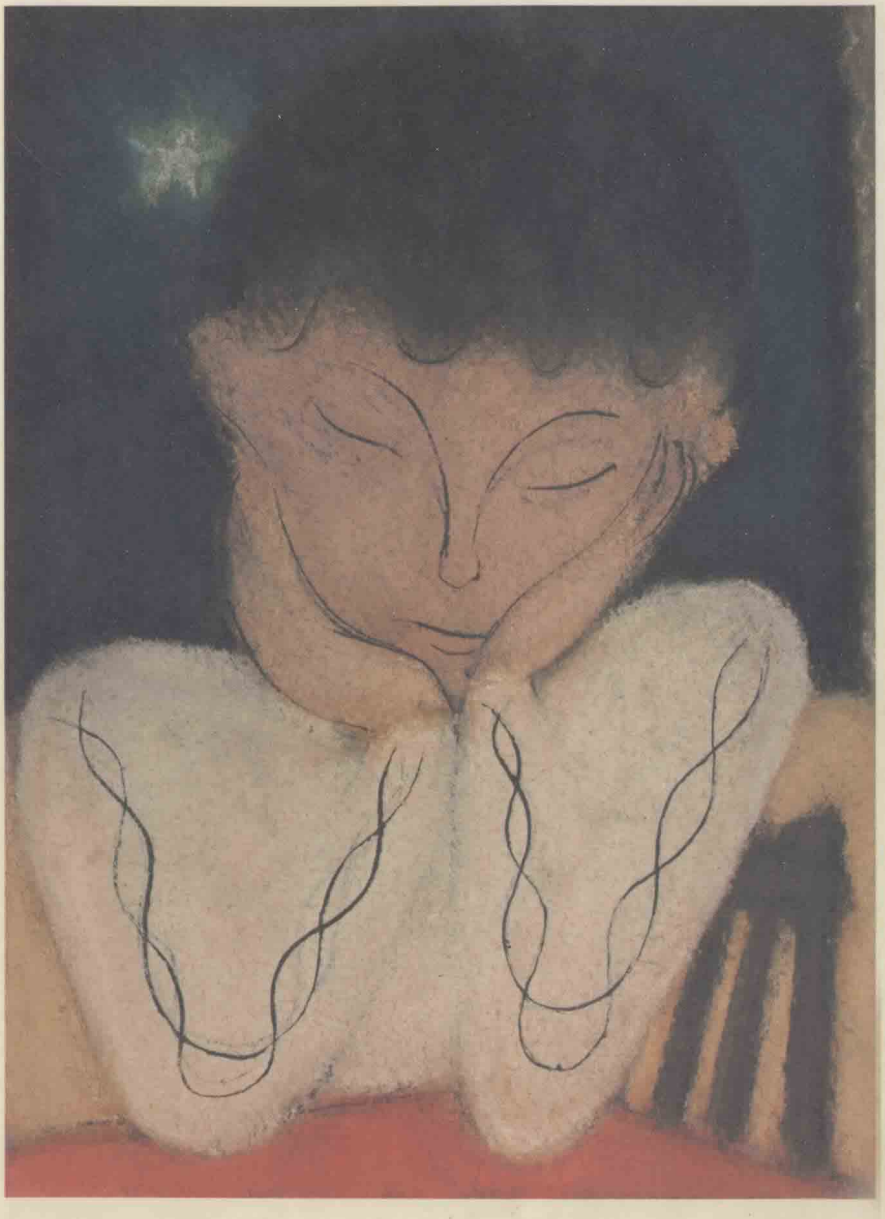
小さな勇気

谷原 文

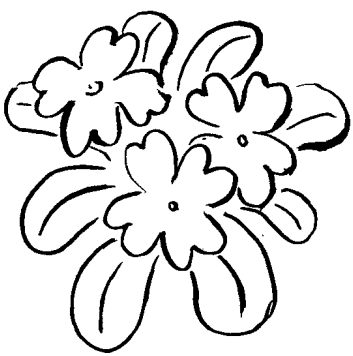


小さな勇気

谷原 文

草土文化

作　谷原　文（たにはら・あや）　1935年生
絵　作場知生（さくば・ともみ）　1959年生



小さな勇気　NDC 913　A 5変型　22cm　168P
1981年3月28日第1刷

発行　田辺　徹　発行所　草土文化　印刷　光陽印刷　製本　昇栄社
住所　東京都千代田区5番町10の6　電話（264）0631　振替　東京5－46122

小さな勇気 ― もくじ

1 登校班二十班――カバーンを忘れたって、友だちを忘れない――全員そろったら、出発さ …… 8
2 おそいよ、ガンちゃん――オマケが職員室に？――かぎの音、閉門だよ――オマケが泣いた――ほんとうのこと書いたのに――テッカリがピクッとした …… 14
3 おれ、パトカーにのせられた――オマケの涙とおかしな話――キノは、やっぱりよびだされていた――あんちゃんのこぶしがふるえている …… 20
4 ためたお金をポケットに入れて――学校なんか行かれない――顔だけじゃわからない …… 30
5 どうなってんだ、おれたち――やっぱり、オマケは――おれたちも、みんなかえそう――でも、やっぱりおっかない――なんとか自分たちの力で――勇気がいるんだ、ほんとうのことを言 …… 38

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うのは
6 金魚は売るよりすくったほうが――おれだって飛ばせるさ――
人形になったおとうちゃんの軍手――新商売〝虫そだてます〟
――クズッて宝もの――でるのは、冷汗ばかり …… 49
7 針金は、ハサミじゃ切れない――道具ってべんりね――パチン
と切れるとはかぎらない――ペンチは商売道具だ――そんなに
ショボショボするなよ …… 55
8 あわてる乞食はもらいがすくない――男の子って、放水車？
山はもう冬――うわさなんて――おじさんは、遠く空を見て
――大きくなったら、わかるよ――おれたちだって、枝からは
なれない …… 63
9 風呂敷っていいね――さすがまあちゃんの親分――おかあちゃ
んたちはたのもしい――電話。先生からみたいだぞ …… 81
10 …… 87

先生！　おれたちがんばらせて――おかあさんの力をかりて――先生だってがんばるよ――ちょっとかんたんに追いはらわれたかな

11 ……97

お知らせをくばった日――タエちゃんのカード――ミーコにだってお仕事できる――タエちゃん、泣かないで――手紙はバザーに関係あるの――どうして学校へ行くの

12 ……104

職員室は、動物の目玉――子どもにとって大切なことって――〝ぼくもやってたんだ〟――どうして私立中学へ――やりたいことは、自分できめるよ――二人は、どうして帰ったの――オマケが熱をだした

13 ……112

キノ！　家族会議です――消しゴム！　いっぱいもってるじゃない――まるでオマケの作文が悪いみたい！――昔、よくしかられたよ――うちは、どろぼうの血統？――あまくないぞ、がんばれよ――テッカリはどこへ

14 ……122

おにいちゃん、ボリュームさげて――だまっていればわからないのに――おれ、うちきらいだ――でて行け！　非行児――おとうさん、おれのあだな知ってる？――ガンちゃん、おれ家出した――おとうさんにちょっと弱いんだ　15
……132
ションボリが、またいない――プレスやは、指の一本や二本――医者へ行ってない――ションボリは、千円札をもって――やっぱり路地に――アホーとはなんだ――やめて、ションボリがかわいそう　16
……146
金魚が光って――どてらのおばけ――お客がならんでる――もう売るものないよ――どろぼうバザーだなんて――かえす？　まるでとったみたいだ――最後までがんばれそう　17
……160
まるで自転車や――そろったら出発――どなられたってあたりまえだよ――たしか三十円だね――これからなんだぞ

装幀　杉松　欅

小さな勇気 ― 谷原　文

1

登校班二十班――カバーンを忘れたって、友だちを忘れない――全員そろったら、出発さ

排水場へ流れこむどぶ川をはさんで、低い軒のかさなりあった路地が、いくすじもうねうねと走っています。

玄関先の土間に、ドカッとすわったプレスが、いっせいにガチャンコの音をぶつけはじめるころ、近くの大きな工場から、朝、八時のサイレンが聞こえてきます。

子どもたちは、まるで、棒でバケツの底でもたたくように、トタンの羽目板(はめいた)に鞄(かばん)をぶつけながら、路地からとびだしてきます。

「早くう。」

「まってえ、いまいくよォ。」

チビは、ランドセルがさかさになるほど腰をまげると、顔を真っ赤にして靴のかかとをひっぱりながら、つまさきを地面に、トントンとたたいています。

「早くう。なにやってんのォ。早く、早く。おくれっちゃうよォ、もっう。」

まあちゃんはたちどまると、ダダッと、足ぶみしました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長いおさげが、泳ぐようにゆれました。
「だってえ、ねえちゃん、おれの靴、きついんだもん。」
チビは、ヒョットコみたいに口をとがらせて追いかけてきました。
そのあとから、
「タカちゃーん。タカッ、カバーン、カバンだよォ。鞄忘れちゃだめじゃない。」
おかあちゃんの声に追いかけられて、
「あれっ。」
タカちゃんは、首をすくめると、頭をおさえました。そして、あわててもどると、背中を、くるりとおかあちゃんにむけ、やっこだこのように両手をひろげて、ランドセルに手をつっこみました。
おかあちゃんは、油が真っ黒くすじにしみこんだ両手を、前掛けでごしごしこすりながら、肩をすぼめて笑いました。
「ねえ、鞄持たないで学校へ行く子なんていないよね。」
おかあちゃんは、みんなにむかって、てれくさそうにそう言うと、タカちゃんのおでこを、コツンとしました。そのひょうしに、ペロンと舌をだしたタカちゃんをおいて、さっさとうちに入ってしまいました。
「さっ、いくぞォ。みんなそろったかあ。ならべよ。いねえやついるかあ。テメエ、まあぼう、だめじゃねえか。忘れてんだろ。早く行ってこいよ。また、泣いてんぞ。」

「いっけねえ。」

まあぼうは、自分の頭をポンとたたくと、地面にランドセルをほうりだしてかけだしました。

まがりかどで、急ブレーキをかけるようにずずっととまり、腰をかがめると、ミーコのうちの玄関を、こそっとのぞきこみました。

〝しめた、まだ、泣いてねえ〟　ミーコは、玄関に立ってキョロキョロと、あちこちを見まわしながら、給食袋をクルクルふりまわしています。

「ミーコ、早くこいよォ。」

まあぼうは、また、こそこそっと、小さい声で呼びながら、手まねきしました。

「はーい、いってきまーす。」

ミーコは、ありったけの声をはりあげました。

〝チェッ、あいつ、また、おそくなったの、わかっちゃうのに〟　まあぼうは、グイッとミーコの手をひくと、かけだしました。

二十班の黄色い旗を、クルクルッとまいて腰にさした班長のガンちゃんは、列の前へ行ったり後ろへ行ったりしています。

ひきずられるように走ってきたミーコとまあぼうが、列に入りました。

「ガンちゃん、あの二人まだよ。」

まあちゃんが、二、三軒先の家を指さしました。

「いちばん近いやつか。ねぼうかなあ。だれか急いで行って来いよ。みんながおくれっちゃうから。」
ガンちゃんが言い終らないうちに、二人がでてきました。
おそろいの、紺のズボンとスカート、白いハイソックス。オマケが後ろの方で、
「ヨォ、学習院。」
と、叫ぶと、あわてて首をひっこめました。
黒いはなおのぞうりをつっかけた二人のおじいちゃんが、通りまで見送りにでてきたからです。おかあさんも、花模様のエプロンを掛けて、玄関でタエちゃんに手をふっています。
二人は、元気がなく、うつむいたままでした。
「来た、来た。早く来いよォ。」
「おっそいんだよ。みんな、まとめておくれっちゃうじゃん。」
「毎晩おそいんだもん、眠いよね。」
あとについてきたおじいちゃんが、まあちゃんにギョロ目をむきました。
まあちゃんは、すまして列に入ってしまいました。
「ごめん、おそくなって。おじいちゃん、早く帰って……。いってきまーす。」
タエちゃんは、下唇(くちびる)をギュッとかむと、列の前の方へかけていきました。
トンちゃんは、すまなそうに、おとなっぽく顔をしかめて、
「ごめん、早く行こう。」

ボソッと、つぶやくようにガンちゃんに言いました。
「もうひとりいないよ、ガンちゃん。」
チビが、いつになく、まわりを気にするような小声で、ガンちゃんのベルトをひっぱりました。
「だれ？」
チビは、ガンちゃんに、声を落とすように手を何度もふると、自分もボリュームを下げました。
「ねえ、あいつ、ほら、おかあちゃんいなくなった。寝てんだよ、きっと。」
ガンちゃんは、いかにも困りきったようすで、チビのオデコを、チョンとつっつくと、壁(かべ)におしつぶされそうな急な階段を、カンカンとかけあがっていきました。
「のぼるゥー、みんな待ってるぞォ。早くこいよォ。」
ドアが待っていたようにあきました。のぼるが、配達されたまま土間に落ちている新聞をふみつぶしながらでてきました。
「じゃあな、いってくるよ、とうちゃん。早く帰ってくっから、もうやめて寝なよ、ね。お昼、おれ給食だから、とうちゃん、ラーメン、戸だなにあるから、ねっ。」
部屋の中はがらあんとして、しいたままのフトンの上で、とうちゃんが、コップを持った手をひざにおいて、うつむいていました。ガンちゃんは、ドアの前でじっと立っているのぼるの肩をポンとたたくと、ならんで階段をかけおりました。
「行くぞォ。ちゃんとならんでえ。あと、五分しかないぞ。あっ、まあちゃん、ションボリ、いつも

のとこにかくれてる？」

まあちゃんは、電信柱のかげを見て、ちょっとうなずきました。

腰からひきぬかれた、黄色い二十班の旗が、道幅いっぱいにとめられた自動車の間を、前に後ろにゆれ動きました。

全員が電信柱を通りすぎると、ションボリが、スウッと、影のようにあとにつきました。

2

おそいよ、ガンちゃん――オマケが職員室に？――かぎの音、閉門だよ――オマケが泣いた――ほんとうのこと書いたのに――テッカリがピクッとした

外は、もううす暗くなっていました。

時計は、もう、とっくに四時をまわったというのに、ガンちゃんは、まだ学校から帰ってこないのです。

まあちゃんが、また、のぞきに来ました。

「ガンちゃん、まだ？」

これで三度目でした。

ガンちゃんのあんちゃんは、まあちゃんが来るたびに、かくれんぼのときみたいに〝まあだだよ〟なんて、ふざけていましたが、なんとなく、まあちゃんのようすが、ふだんとちがうような気がしてきました。

「まあちゃん、なにか、急用？」

「ううん、いいの。また、あとで来る。」

まあちゃんは、おさげをひるがえすと、かけだして行ってしまいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com